原市場が生んだ偉人、山川兄弟

-郷土館収蔵資料目録７『原市場地区諸家文書目録』の成果を中心に-

【第三回　助教授時代の生活】

第二回では、山川家の人物について概要をご紹介しました。今回は、義太郎が帝国大学工科大学助教授を務めていた明治 20 年代を中心としたお話です。

１　帝国大学助教授になるまで

義太郎は明治 15(1682)年に工部大学校電信科を卒業後、工部省電信局の技手になりました。当時、電信科の卒業生は電信局の技手になるのが一般的であり、義太郎たち４期生も６人全員が電信局に就職しています。当時の官員録（役人の名簿）を見ると義太郎たちのほか、先輩にあたる２期生や３期生、後輩である５期生、６期生の名前も見られます。このことをみても、電信科卒業生による電信局への就職率が高かった様子が伺えます。電信局に就職しなかった者は、その大半が大学に残り講師や助教授などに就きました。

電信局では、技師としての等級や初任給が工部大学校卒業時の成績によって決められていました。第一等卒業生（一番上のランク）であった義太郎は７等技師で月給 30 円でしたが、これがもし第二等卒業生となると、８等技師で月給は 25 円になってしまいました。

義太郎は技師としておよそ５年間働き、明治 20 年に帝国大学工科大学電気工学科の助教授になります。帝国大学工科大学は、明治 18 年の工部省廃止と翌 19 年の帝国大学令制定に伴って、工部大学校と東京大学理学部が統合してできた学校です。

義太郎が助教授になったとき、電気工学科では工部大学校１期生の志田林三郎が教授を、３期生の中野初子が助教授を務めていました。中野は翌明治 21 年に留学、24 年に帰国するとすぐに教授となります。その直後の明治 25 年には志田が教授在任のまま逝去、同年授業嘱託として東京大学理学部出身の沢井廉が就任しました。しかし、沢井は次年度の名簿からその名前が見られず、明治 27 年に死亡しています。したがって、明治 26 年に導入された講座制（1 人又は複数の教官が 1 つの講座を担当する制度）によって電気工学科が 2 講座となったとき、1 つは中野教授が担当し、もう一つを義太郎と講師として戻ってきていた藤岡で分担することになりました。

２　助教授としての生活

山川家文書には、明治 27 年の史料がたくさん残っています。なぜこの年の分

だけが残っているのかその理由は不明ですが、これら明治 27 年の史料から義太郎の生活を探ってみることにしましょう。

明治 27 年に起きた大きな出来事に、明治東京地震があります。この地震は東京湾北部を震源として発生し、マグニチュード 7.0 という大変大きなものでした。被害は東京と横浜を中心に 100 棟以上の建物が破壊され、死者は 30 名以上にのぼりました。地震が起きたのは 6 月 20 日午後 2 時ごろでしたが、この日以降、義太郎のもとには北は仙台から南は熊本まで、たくさんの見舞の書状が届いています(山川家文書 500、559、650 ほか)。

またこの年の夏、妹のかつが結婚します。縁談の話は 4 月頃から進められ(山川家文書 485)、6 月には下赤工に住む母しのから縁談の取り計らいを頼む書状が義太郎のもとに届いています(山川家文書 620)。いつごろ縁談が成立したのか、詳細な年月日は不明ですが、7 月の下旬には結婚を祝う書状が届いていることから、少なくともその前だと考えられます(山川家文書 588)。

助教授としての義太郎に目を向けると、講義と学会への参加などで多忙な生活を送っていた様子が伺えます。帝国大学工科大学での講義が分担であったことは既に述べましたが、義太郎はこのほかに東京工業学校や工手学校でも教鞭をとっていました(山川家文書 260、261、507、656)。学会については主として工学会、電気学会、数学物理学会に所属し、工学会、電気学会では編集委員も務めていました。これらの学会はいずれも工部大学校の卒業生が創立に関わっており、義太郎も中心的な役割を担っていたと思われます(山川家文書目録単位ｂ)。

しかし、義太郎自身についてはあまり体調が思わしくなかったようで、工手学校の講義を代わって貰っている様子や、7 月末の前橋出張の際に出された手紙には「少々不快」「気分あしき」という文言が見られます(山川家文書 637、690)。そしてその直後の 8 月と 9 月の少なくとも二度、療養に出かけています。療養先は一度目が塩原(栃木県)で、二度目が箱根宮ノ下でした(山川家文書 703、247 ほか)。

このほかにも義太郎は日本の電信学を牽引する存在として、民間会社や逓信省から度々電信工事などに関する相談を受けたり、現場に赴いたりしていました。また、電信に関する仕事への斡旋などについて依頼されることもあったようです(山川家文書 675、707)。

３　信次郎、弘毅、下赤工の家について

山川家文書の中に、信次郎、弘毅、そして達蔵死去後の下赤工の山川家に関する史料はほとんど残されていません。しかし、彼らが兄義太郎や父達蔵に送

った手紙などから、彼らの生活のほんの一部を垣間見ることはできます。

信次郎は、明治 16(1883)年に上京しました。一年後の明治 17 年 6 月には当時の入校試験の開催状況について、さらにその翌年の明治 18 年 6 月には大学合格の報告を原市場の実家にいる父達蔵にしています(山川家文書 483・484)。信次郎が学校に合格した後に義太郎が達蔵へ送った手紙からは、信次郎の学費を義太郎が負担していた様子が伺えます(山川家文書 576)。このほか里帰りの予定などについて、信次郎は父の達蔵や兄義太郎、弟の弘毅へ度々手紙を送っていたようです(山川家文書(山川家文書 521、535、699 ほか)。

弘毅も信次郎と同じように、里帰りに関する手紙を出していますが、より特徴的なのは明治 27 年の義太郎療養中のときのものです。この時期の手紙を見ると、療養先にいる兄夫婦への物資送付や、義太郎の妻「なみ」の里帰りの調整を行ったり、義太郎の代わりに帝国大学への書類提出を頼まれていたりする様子が伺えます(山川家文書 567、594、609、614、703 ほか)。また、高等中学における弘毅の専攻について、義太郎がアドバイスしたりもしています(山川家文書 594)。義太郎と弘毅は 15 歳差で、この時父の達蔵は既に他界していたため(明治 23 年没)、もしかしたら弘毅にとって義太郎は兄であり時に父親のような存在だったのかもしれません。

達蔵が亡くなった後、下赤工には義太郎たちの母しのと、達蔵の弟竹蔵らが生活していました。東京に生活拠点があった義太郎も気にかけていたようで、竹蔵から原市場の杉の代金を知らせてもらったり、原市場の家に関わる金銭出入帳が義太郎の名前で残っていたりしています(山川家文書 616、15、85、86、87)。また、明治 35 年には亡祖父母と亡父の祭典も執り行ったようで、会計簿が残っています(山川家文書 107)。住所が下赤工となっている義太郎宛の書状が何通か見られることから、度々帰省もしていたのかもしれません(山川家文書 489、521、541、582 ほか)。

さて、ここまで義太郎助教授時代の様子を見てきましたが、義太郎は明治 29 年から 3 年間の留学をし、帰国後東京帝国大学の教授に就任します。

次回は、義太郎が教授になって以降の様子について、みていきたいと思います。